

vol.1  
2004.10

創刊号

CONTENTS

- センター長挨拶 2
- 大学教育創造センター概要 3
- スタッフ挨拶 4
- 現代的教育ニーズ取組支援プログラム  
(現代GP)に選定される!! 5
- 企画・評価専門部会の紹介 6
- 教育創造専門部会の紹介 8
- 「自律創造学習」の目的と授業展開 10

# Create

高知大学大学教育創造センター



「自律創造学習」の授業風景



### 持続的な営みとしての教育創造

大学教育創造センター長 辻田 宏

大学教育創造センターの基本ミッションは、その名称にあるように、新しい大学教育を「創造」していくことにあります。全国の数多くの国立大学に同じようなセンターがありますが、「創造」をその名称に組み込んでいるのは本学だけです。その理由は、本センターが教育を実施していくことではなく、「創造」していくという企画・立案機能を基本的性格とする組織だからです。

ところで、この10年近くの間、大学は教育改革という荒波に揉まれ続け、様々な努力をしてきました。そのような中で、いわゆる「改革疲れ」という現象が起きており、近年はそのことを憂慮する声が増えています。しかしながら、果たして大学は教育改革の歩みを止めることができるのでしょうか？

大学教育に対する社会や学生のニーズは、時代と共に絶えず変化し続けています。そして、この間の大学側の集中的な努力や成果は、その変化に対してまだまだ十分ではないことが学内外から指摘されています。様々な改革に取り組んできたものの、やはりこれまでの大学は、「学問の府」という窓から、社会や学生を眺めていたのであり、社会や学生の視点から自らの教育活動を客観的に眺め構築していくという努力を怠ってきたように思います。社会や学生が不断に変化する存在である以上、それに対応する新しいものを持続的に「創造」していく営みが大学教育に求められるのは当然のことであり、それを放棄することは、大学の存在価値と責任を放棄するに等しいことなのだと思えます。従って、教育の普遍的な価値を大切にしつつ、常に新しいものを持続的に「創造」していくことは大学として当然のことであり、「改革疲れ」を憂慮している暇はありません。

最近、学内の様々な会議で「今後の高知大学は教育を中心（特色）に」ということがよく聞かれるようになりました。そこには、地方国立大学としての法人化後の経営戦略的な意味合いが込められていると思われませんが、センターとしては、学生に対する教育責任を果たすという立場から、教育の質の保証と向上のための新しい教育プログラムや評価システムをどんどん開発していきたいと考えています。そして、センターの名に恥じぬように何よりも創造的で斬新な取り組みをしたいと考えています。微力ではありますが、そのために全力を尽くす所存ですので、どうかよろしくお願いいたします。

## 高知大学 大学教育創造センターの概要

大学教育創造センターは、高知大学における教育改革を継続的に行い、その「質」の保証の検証に取り組むとともに、学生の期待に応えつつ充実した大学教育を構築し、個性豊かな大学づくりを推進することを目的とする。そのため、以下のような事柄に取り組む。

### 1. 大学教育の目標・戦略構築とその実践・アカウンタビリティの必要性

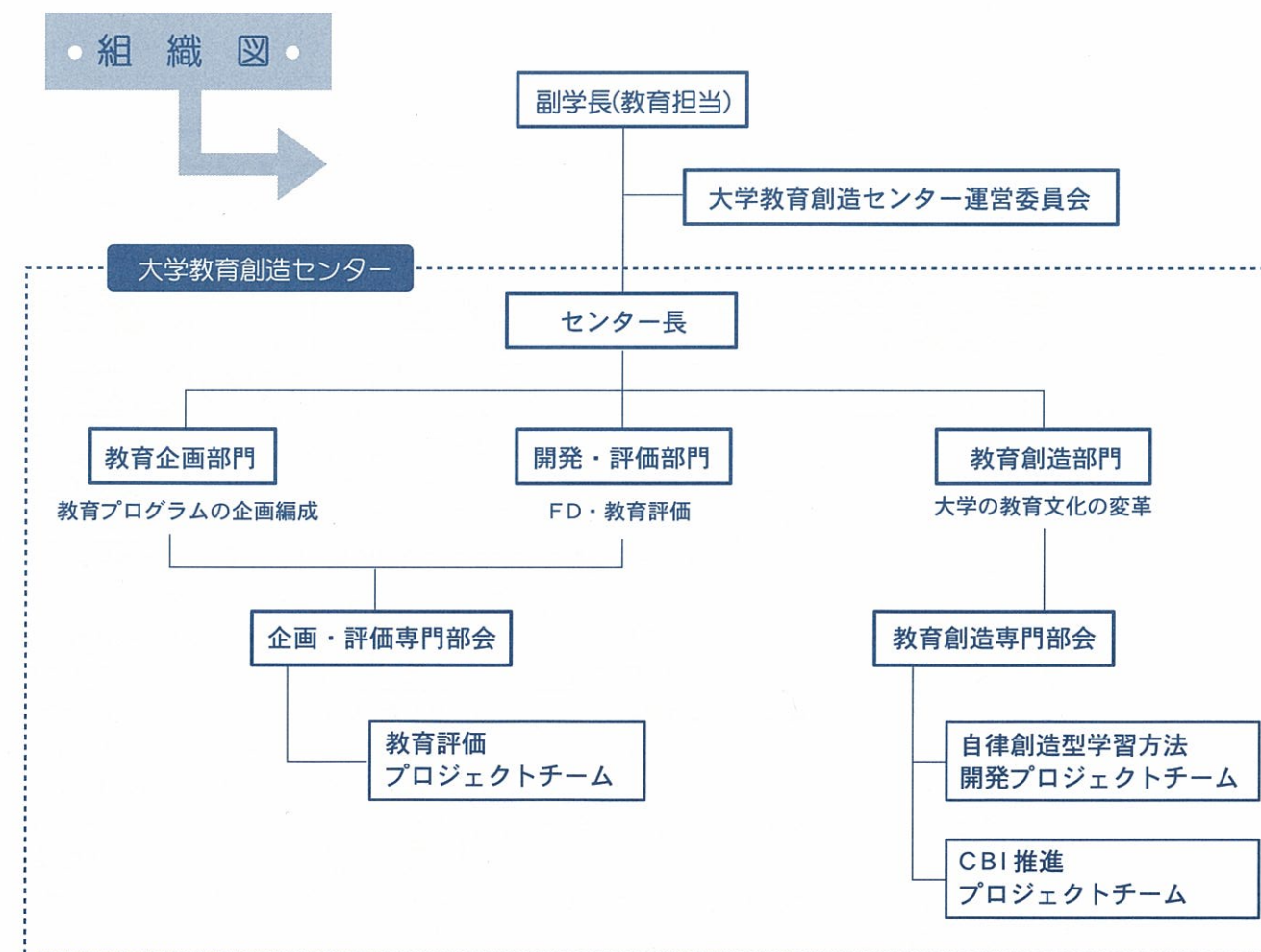
- 共通教育(教養、情報と外国語を含む教育)の企画、科目編成、実施
- 全学教育(キャリア・ボランティア・資格等の教育)の企画、実施の立案
- 大学教育の地域社会への開放・還元

### 2. 大学教育の開発、改善、評価、向上の必要性

- カリキュラム開発、テキスト開発
- 教職員の教育能力の開発(FD、SDを含む)
- 教員の教育評価とフィードバック(教員相互授業参観、研修、授業評価)
- 入試→教育→出口の分析と評価、学生情報の一括管理→教育プログラムへの反映

### 3. 学生中心型大学教育の特徴づけ (高知大学にしかない大学教育の特徴)

- 学生の自己学習力の開発・支援
- 獲得知識の社会での応用と活用を通して学生が自己確立(準正課教育)
- 学生による学生のための支援教育および社会活動(情報、国際交流、就職)





高知大の優位さを生かし続ける

たつかわ あきら  
立川 明  
教育企画部門長  
大学教育創造センター 助教授

今年の3月まで理学部の物質科学科に所属していました。専門は有機化学ですが、赴任以来有機化学の授業を担当することはほとんどなく、生物化学と同演習、計算化学、情報処理などの専門とは少し違う分野の授業を担当してきました。学生と一緒に自分の勉強を進めながらの授業だったため、学生がわからないところがよくわかっていました。また、学会や大学が行っている出張講義、出前授業等で、学外の人に対して有機化学のお話をする機会が増えてきました。専門教育とは当然レベルも内容もずいぶん異なります。有機化学を専門にしない人たちに有機化学の話をする上で、様々な工夫が必要になり、いろいろな失敗を経験してきました。このよう

な経験を新しい企画や授業担当をする際に生かしていきたいと思います。

最近では教務関係の委員をすることが多くなり、共通教育委員会関係のセミナー等に参加する機会をいただくことができ、他大学の取り組みについて知ることができました。高知大学の方がはるかに進んでいる点や、はるかに恵まれている点があることを実感していますが、それから先にさらに一歩進んで先頭を走り続けていく努力を怠ってきたのではないのでしょうか。他大学の一生懸命さが感じられるたびにそう思ってきました。今後もいろいろなセミナー等に顔を出しては情報を集め、高知大の優位さを生かせるような取り組みを提案できればと思います。



教育重視の機運を高めるために

かんの こうこう  
菅野 光公  
開発・評価部門長  
大学教育創造センター 教授

2004年4月1日、当センターに着任した菅野光公です。それまでは、室蘭工業大学国際交流室長として、主に留学生教育と日本人学生の国際理解促進を担当していました。

私は、大学卒業後30年間、日本石油株式会社で営業・広報・調査・企画等の仕事をしてきました。民間企業のビジネスマンとして物作りとその販売の最前線にいました。海外駐在も経験し、国際環境・エネルギー問題に携わるうちに、こうして経験したことや得た知識を、次世代の諸君に伝達する必要性を痛感、「教育者になろう」と決断しました。人生の後半は『人作り』に携わることに転換したわけです。

1998年11月、室蘭工業大学に採用されて、夢中になって授業やゼミ、海外研修などをやって

いましたが、慣れるに従って大学の先生の多くが研究重視・教育軽視であることに気付きました。親しくなった学生諸君たちに、先生に対する不満の本音を語ってもらっても、感想は同様でした。そこで、教育重視の機運を高めるために、私が同僚教員に呼びかけて、自分たちの授業のやり方についてレポートを書き、それを大学の月刊誌に連載しました。教育に対する熱い思いを綴ったものもありましたが、授業のやり方への悩みや失敗談、学生諸君とのコミュニケーション作りの苦勞など、とても正直なレポートが多数寄せられました。2年間の連載を本にしたところ、大学の内外から予想以上の反響がありました。そんな時に『高知大学大学教育創造センター』の設立と教員公募を知って応募し、採用されたわけです。

## 現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に選定される!!

### 課題探究能力育成型インターンシップの開発

(副題) コラボレーション型インターンシップ (CBI) 授業システムの全学導入

#### 現代GP採択プログラムの取組概要と選定理由

##### 【取組概要】

インターンシップには本来的に学び動機向上の機能がある。ところが、従来の体験型(2週間程度)では、この機能の習得さえも困難というのが現状である。他方、社会性や課題探究能力の脆弱さも今日の学生の課題となっている。今回開発を目指すコラボレーション(協働)型インターンシップ(CBI: Collaboration based Internship) 授業システムは、これら諸課題を克服する学習方法と教育方法のプログラムであり、インターンシップの高度化である。

CBI 授業システムの特徴は、学生によるアイデア立案と企画見本市方式のマッチング(事前指導)、受入機関と協働のプロジェクトの策定・遂行(実習指導)、成果公表の公開と実践の総括(事後指導)にある。これらが有機的に連携機能することで、学び動機、社会性や課題探究能力の向上が実現される。また、これらの効果を制度的に保証するため、学長の下に学内外協働組織「CBI 授業システム開発委員会」を新設する。

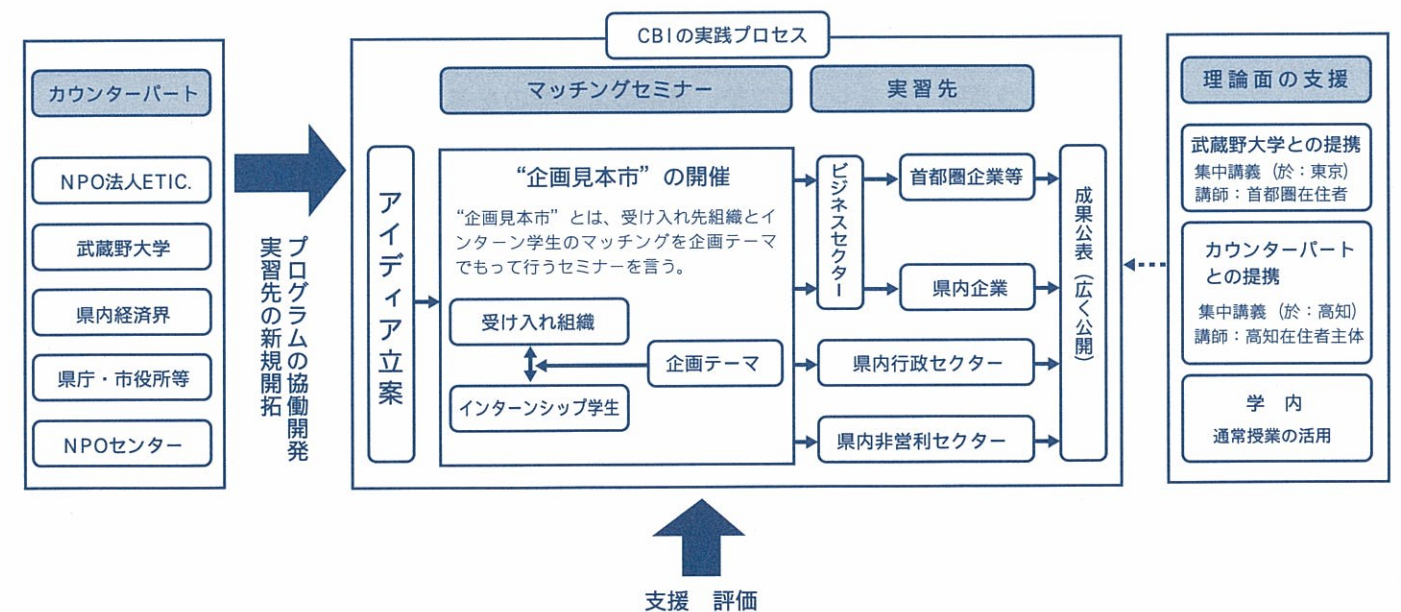
##### 【選定理由】

これまで実施している体験型インターンシップの蓄積の上に、課題探究能力の育成を目指して、既に学内の一部で導入しているコラボレーション型インターンシップを全学的に展開しようとするもので、独創性と新規性に富んだ取組です。学生の「表現力・プレゼンテーション力・コミュニケーション力・異文化理解力」などを醸成する人材育成として、社会と大学双方のニーズにマッチしており、組織的な取組である点も評価できます。

関係教員によるファカルティ・ディベロップメントの着実な実施をはじめ、学内の適切な支援協力体制が構築されており、教育関連NPO、他大学、地元産業、行政との確実な連携のもと、堅実な実施計画を有していることから、優れた信頼性の高い提案であると考えられます。

今後は、大学低学年からコラボレーション教育に必要な専門性をどのように身につけていくか、また、相手企業との関係をどのように構築していくかなど、全学的に展開することによって、どのような課題が抽出され、乗り越えていくか注目されます。

#### コラボレーション型インターンシップ (CBI) 授業システムの構造



#### CBI 授業システム開発委員会

【学外委員】 県内経済界、地方自治体、四国経済産業局、NPO 法人 ETIC、武蔵野大学、高知県 NPO センター、人事コンサルタント等  
【学内委員】 教務担当副学長、大学教育創造センター長、関連教育研究評議員、インターンシップ委員長、各学部学務委員長、他必要な教員・職員

新しい学習支援システムの構築に向けて

企画・評価専門部会長 立川 明

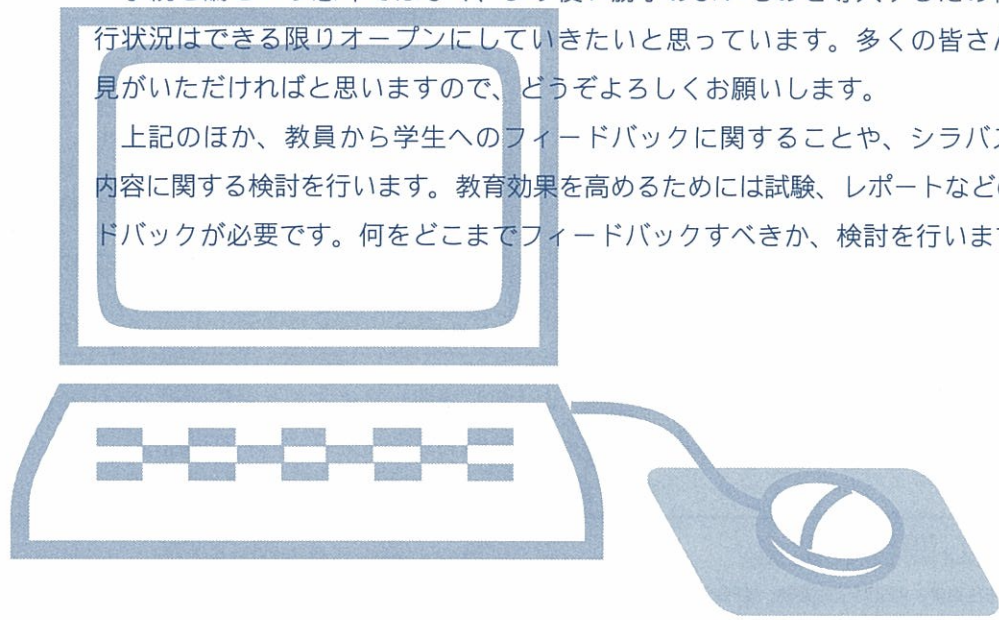
16年度は関連する内容が非常に多いので、企画と評価の部分で合同の専門部会をおくことになりました。16年度の年度計画では、多くの部局でアンケート調査等を行い、評価し、次の企画へ向けて検討をすることとなっています。これをセンターとして支援するための活動を行います。

まず、多くの部局で行われるアンケート調査を支援するため、その雛形の作成やWeb上でアンケートの実施ができるシステムの導入を行います。主に使っていた多くのアンケートを実施する各部局の教員、委員会の委員長（教員）、また実際に記入し、提出するのは学生ですので、教員と学生に使いやすいことを必須条件に、検討を行います。

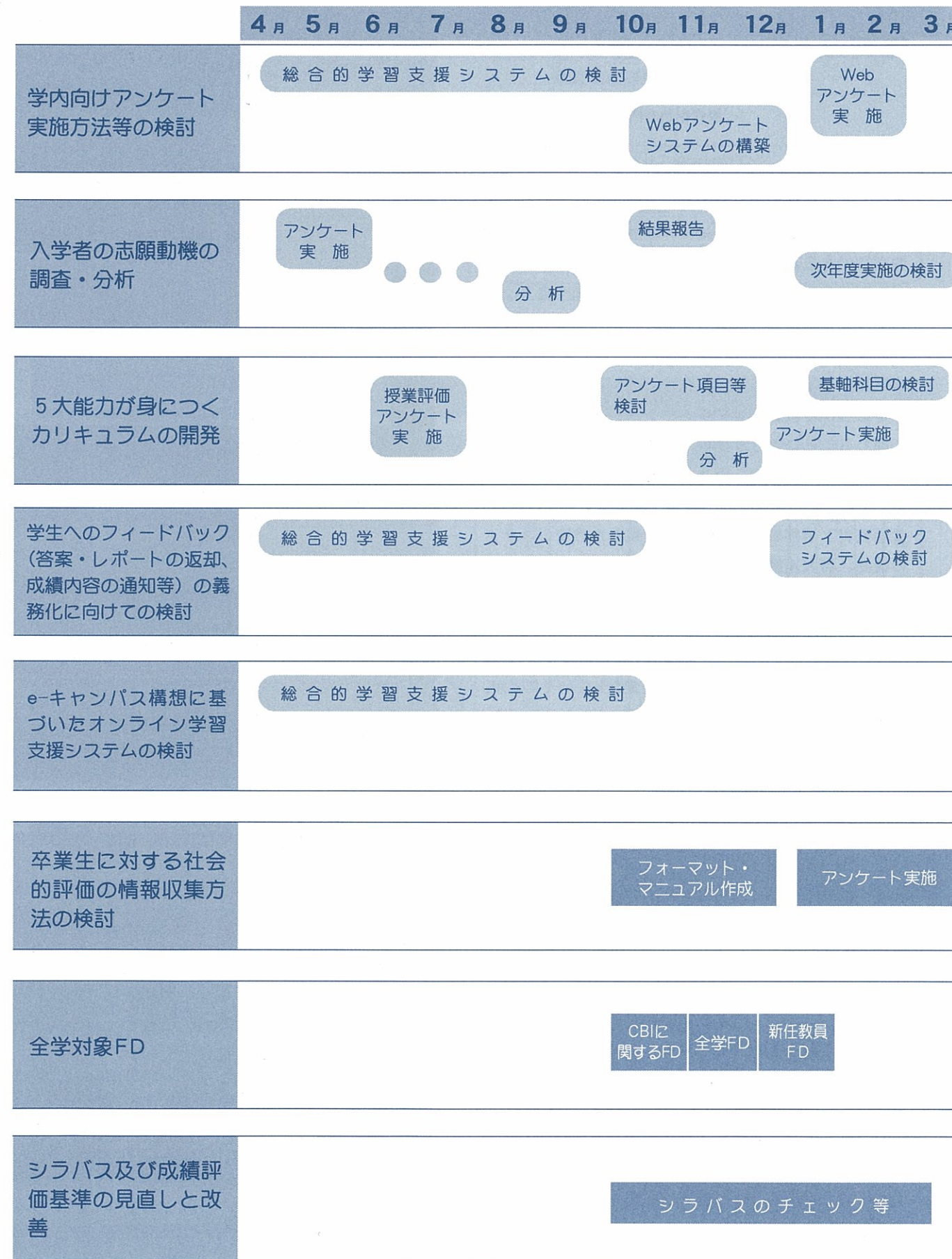
17年度以降は、成績評価や電子化したシラバスとの連動等を行います。将来的に教務関係のシステムを一本化すべきだと思いますので、アンケートシステムもあらかじめ連動可能であることを前提にすべきであると考えています。新しいシステムでは、より使い勝手のよいものに変更が可能であること（自由度）、他のシステムとの連動または取り込みが可能であり、必要な機能が付け加えていけること（拡張性）が重要な機能の一部です。

手続き論という意味ではなく、より使い勝手のよいものを導入するため検討の進行状況はできる限りオープンにしていきたいと思っています。多くの皆様のご意見がいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

上記のほか、教員から学生へのフィードバックに関することや、シラバスの記載内容に関する検討を行います。教育効果を高めるためには試験、レポートなどのフィードバックが必要です。何をどこまでフィードバックすべきか、検討を行います。



企画・評価専門部会の活動



## 機動力と創造力を発揮して

教育創造専門部会長 辻田 宏

教育創造専門部会は、センターの教育創造部門内に設置された部会です。センターと同一名称の部会であることからわかるように、同部会はセンターの中核的存在であると言ってもよいでしょう。もちろん、他の専門部会も重要ですし、それらとの連携や協力なくしては教育創造専門部会も十分に機能し成果をあげることはできません。

同部会は、正課外教育も含めた広い意味での大学教育のあらゆる教育プログラムやシステムの改革や創造に関わることとなりますので、それらには様々なレベルや内容があります。例えば、社会や学生ニーズに対応した新しい授業モデル（学習＝教育モデル）の開発、共通教育と学部教育の連続性を重視した教育システムの構築、高大連携の教育プログラムやキャリア教育システムの開発、さらには正課外活動としてのS・O・Sや「プレゼンフェスタ」に対する支援もその対象です。そして、それら大学全体の教育改革や教育創造のために、迅速かつ機動的に企画・立案機能を果たしていくことが、同部門に与えられた基本的な任務だといえるでしょう。

現在、恒常的な業務の他に2つのプロジェクトチームが同時進行で活動を展開しています。「自律創造型学習方法」開発プロジェクトチームは、中期目標・計画及び16年度実施計画の実現の一環として、新しいかたちの課題発見型授業（課題探求能力育成型授業）＝「自律創造型学習」（※10・11頁参照）の開発と実験的実践を進めています。もうひとつの「CBI推進プロジェクトチーム」は、課題探求型のインターンシップを中核とした「CBI」授業（※5頁参照）を開発・推進するために設置されました。さらに近々には、高大連携の教育プログラムの開発に関するプロジェクトを県内のある高校との共同で立ち上げることも決定しています。

今後も、具体的な課題ごとに専門部会やプロジェクトチームを臨機応変に組織し、機動力及び企画・立案力を十分に発揮して本学教育の充実と発展に寄与していきたいと考えています。

### 教育創造専門部会委員

- 辻田 宏（大学教育創造センター：部会長）
- 池田 啓実（人文学部）
- 上田 健作（人文学部）
- 石筒 覚（人文学部）
- 岩佐 和幸（人文学部）
- 小島 郷子（教育学部）
- 赤松 直（教育学部）
- 古川 泰（農学部）

### 「自律創造型学習方法」開発プロジェクトチーム

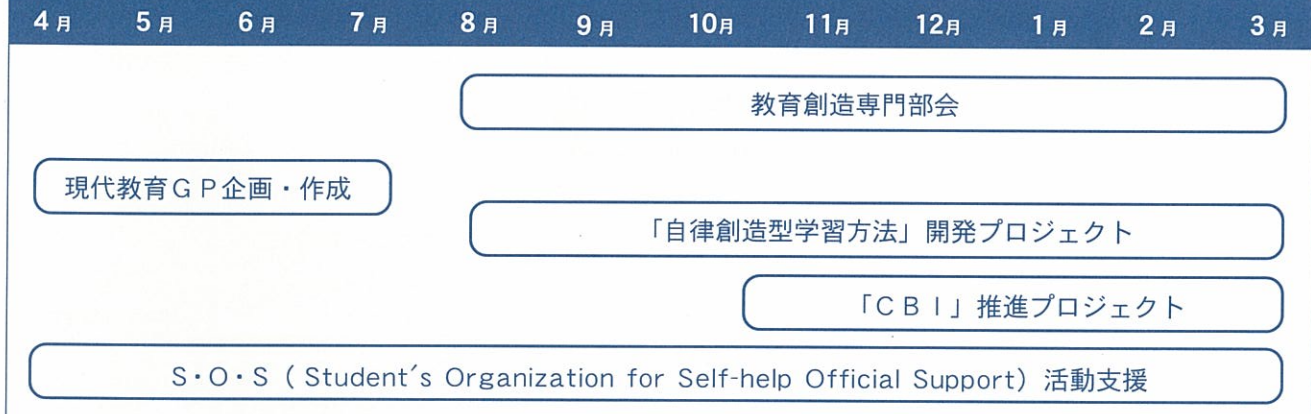
- 辻田 宏（大学教育創造センター：チーム責任者）
- 村端 五郎（人文学部）
- 石筒 覚（人文学部）
- 小島 郷子（教育学部）
- 内田 純一（教育学部）
- 佐藤 純一（医学部）

### 「CBI」推進プロジェクトチーム

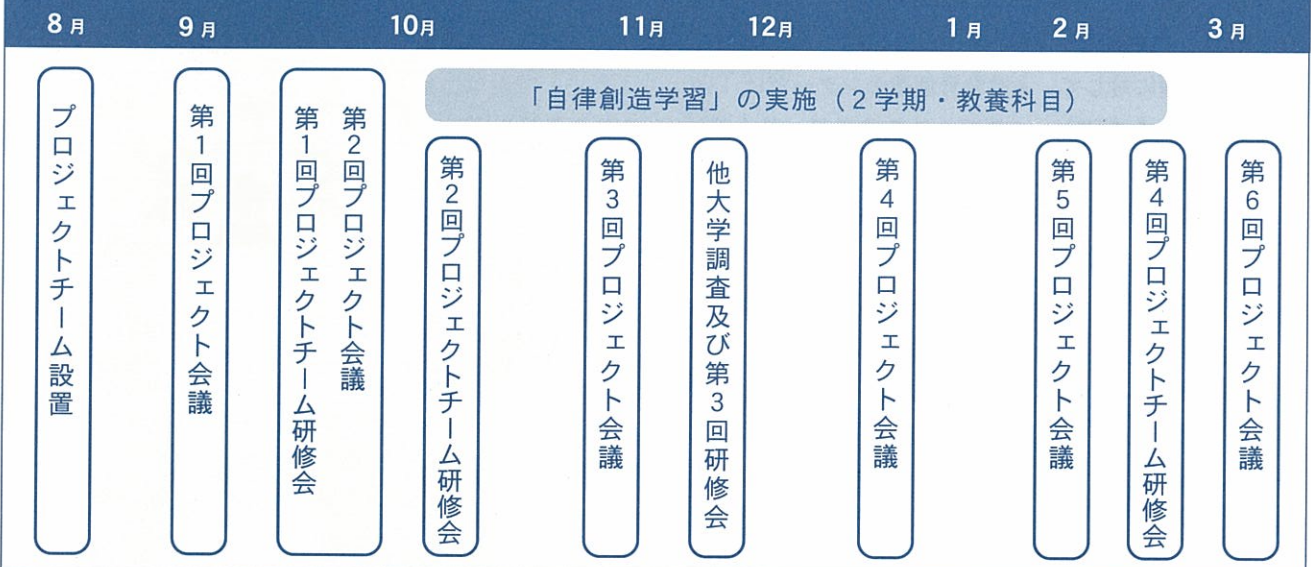
- 上田 健作（人文学部：チーム責任者）
- 池田 啓実（人文学部）
- 石筒 覚（人文学部）
- 岩佐 和幸（人文学部）
- 鈴木 啓之（人文学部）
- 池田 和夫（人文学部）
- 小澤 万記（人文学部）
- 中澤 純治（人文学部）
- 小島 郷子（教育学部）
- 松井 透（理学部）
- 辻田 宏（大学教育創造センター）
- 菅野 光公（大学教育創造センター）

## 教育創造専門部会の活動

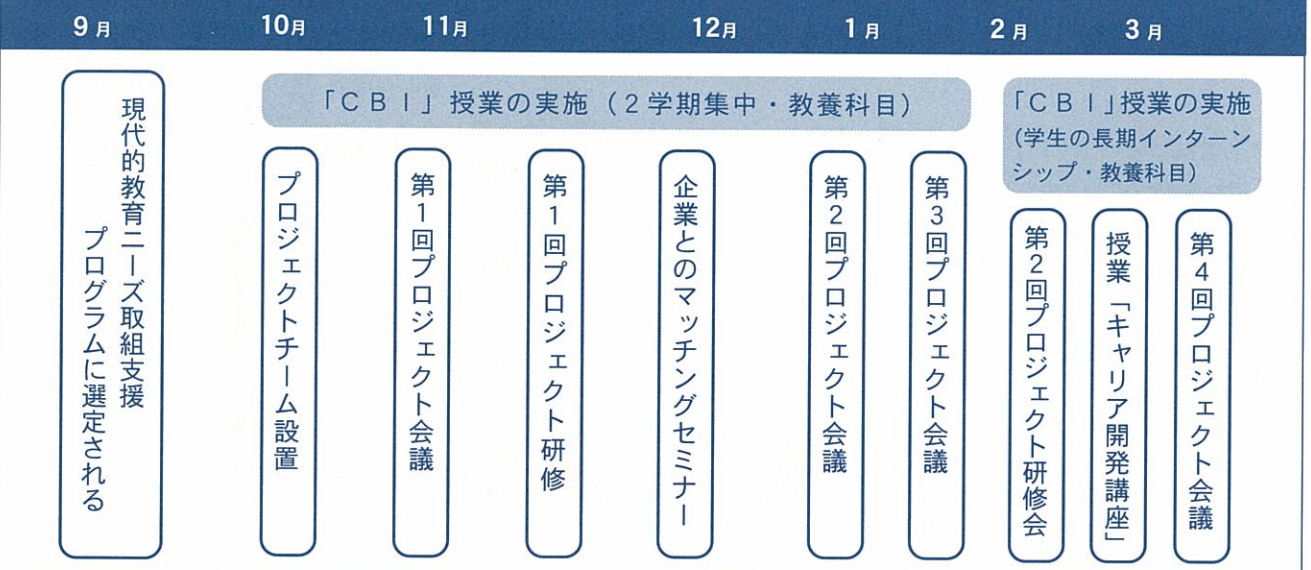
### 教育創造専門部会



### 「自律創造型学習方法」開発プロジェクト



### 「CBI (Collaboration Based Internship)」推進プロジェクト



## 「自律創造学習」の目的と授業展開 ～新しい課題探求型の授業を目指して～

本学では、「教養教育（全学共通の教育）」においては、各学部の専門分野と有機的な関連を意識しつつ、地域の企業アンケート等で求められた5つの能力（日本語による表現力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、異文化理解能力、情報処理能力）と幅広い教養を身に付けた人間性と社会性豊かな人材を育成する」という中期目標・中期計画を立てており、平成16年度年度計画では課題探求能力の育成のための具体的な検討と実験的な実践を行うことになっています。この年度計画に対して、大学教育創造センターでは「自律創造学習」を企画し、2学期より教養科目（社会系）として開講しています。

「自律創造学習」は、PBL（Problem Based Learning）という学習方法を基本ベースとしています。PBLとは、問題基盤型学習や問題解決型学習ともいわれ、課題探求能力を育成する上で効果的な学習方法の一つとされており、近年、国内の医学及び看護系大学・学部を中心に急速な拡がりをみせています。本学医学部でも、このPBLを平成14年度から専門科目として導入し、課題探求能力の育成に力を入れています。

PBLは、知識の習得という学習の結果よりも、学習のプロセスにおいて学習者が主体的に身に付けていく能力を重視するものであり、チュートリアル教育といわれる「教育方法」にその特色があります。チュートリアル教育とは、従来のような教員が教え込む講義形式の指導は行わず、学生の主体的な自己学習を促し、少人数グループでの討論を促進する教育方法です。チューターは、教えるはならない存在に徹し、議論に特定の方向付けをしてはいけません。PBLでは、このような教育方法によって、課題探求能力、論理的思考力、主体的判断能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を育成していくことを目的とするものです。

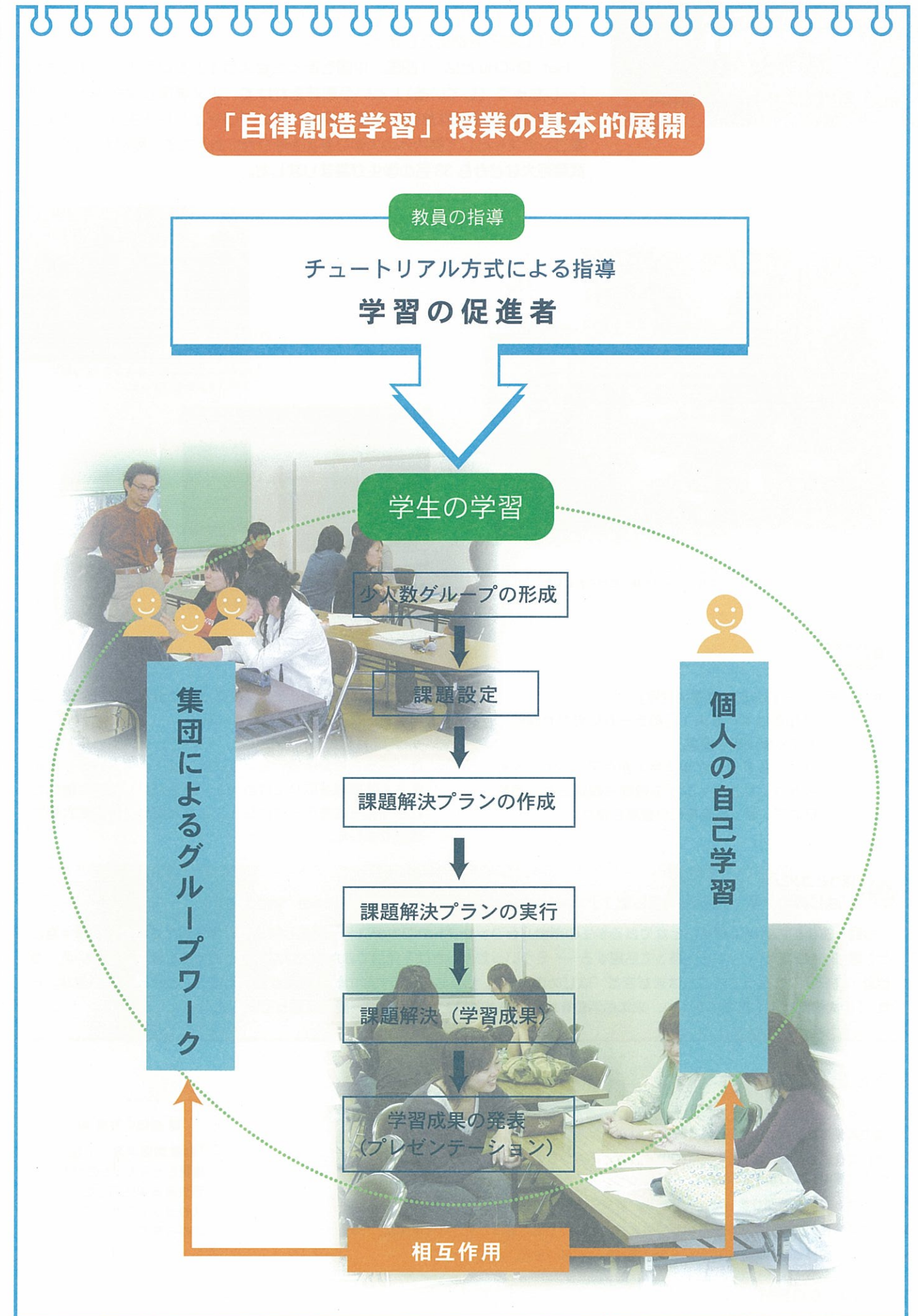
前置きが長くなりましたが、ひとこと言えば、「自律創造学習」は、医学部のような専門的な職業人の育成に有効とされるPBLを低学年次にも展開できる教養的な学習方法にモデルチェンジしたものであるといえ

ます。そして、両者の根本的な違いは、PBLが予め課題や課題解決のプロセスが決まっているのに対して、「自律創造学習」は、学生自身が課題設定を行い、課題解決のプロセス（プラン）を作成するところにあります。従って、多義的な結論をもたらすような抽象的な課題を設定することが可能となること、解決のための多様なプロセスが創出されることがPBLとの大きな違いです。

右図の「自律創造学習」の基本的展開に示しているように、学生は、自己学習と少人数集団における討議や他の集団とのコミュニケーションと相互批判を通して、課題設定や課題解決プランの企画・立案に取り組み、さらには解決プランを自らが実行していくことになります。また、それらの成果のプレゼンテーションも「自律創造学習」の必須の構成要素となっています。それらの一連の自律的な学習活動を通して、課題探求能力の基礎として必要な創造的思考能力を育成していこうとするのが「自律創造学習」なのです。

また「自律創造学習」は、専門的な教育で求められる論理的思考力を養成するための基盤学習と位置づけることができます。多くの学生は社会経験に乏しい一方で、枠にとらわれない自由な発想を有しているはずで、従って、自由で多様な論理展開を編み出す創造的思考力を基礎とした論理的思考力の育成は、教養教育課程において早期に実施されることが、課題探求能力の育成において最も合理的・効果的であるといえます。「自律創造学習」はその点で、いわば、学生の創造性を早期に解き放つプロセスであり、入学直後の低学年次教育として取り組むことが必要です。同時に、低学年次段階において、この学習を実践することは、学生自身が専門知識の必要性を認識することにもなるので、専門教育に向けた動機づけ学習としても適していると考えます。

（「自律創造型学習方法」開発プロジェクト：辻田 宏）



# Action ①

## Hot ShiChu Project 2004

今回は、9月中旬に3泊4日の合宿形式で行われた「Hot ShiChu Project 2004」の様子をお伝えします。

Hot ShiChuとは、「四国、中国を熱くさせよう！」という思いと土佐弁の「〜しちゅう（している）」という意味をかけて、人文学部社会経済学科の学生を中心に結成された団体です。彼らがこのプロジェクトを主催し、政策立案コンテストとして県内外の大学に参加を呼びかけたところ、愛媛大・龍谷大・武蔵野大などから33名の学生が集まりました。



合宿2日目の夜までに中間プランを仕上げました。時間との戦いの中、熱の入ったディスカッションが繰り返されました。



各チームは2人の社会人から10分間ずつアドバイスを受けました。



最終プレゼンでは、まず予選で4チームに絞られ(全8チーム)、残ったチームが決勝へ進みました。

### 課題

「地域に根ざした総合的な学習の提案」

ルール：参加者は4～5人1組のチームに分かれ課題に対する解決策を提案。

フィールドワークや社会人からアドバイスもらうコンサルティングの時間も設定され、最終日にプレゼン発表を行い優勝を競う。

### 審査

結果、Ambitionチーム（岡本武士、埴康介、恒川竜慶、長崎恭子、森下貴子）に優勝が決定！

今年10月に新しく誕生した「いの町」をフィールドにした「石ころ大作戦」というプランは、合併というリアルタイムな問題を取り上げたこと、誰もが身近で手に触れたことがある石をテーマにしたことなどが高く評価され優勝に至りました。



### ほっとコメント

「“はじめの一步” 踏み出しました！」（Hot ShiChu代表者 人文学部社会経済学科3年生 有光 紀子）

今回、「主体的に行動に移すことができる学生の創出」をコンセプトにコンテストを開催しました。学生同士が出会い、様々なことを感じ、自らのフィールドへ帰って活躍する——そういったきっかけを提供できたのではないかと考えています。とはいえ、参加者・スタッフにとってもこれはまだまだ“はじめの一步”。今後も、地方大学の学生活動が活発化することを願っています。また、「他大学間交流」にも力を入れ、来年も活動を続けていきたいと、スタッフ一同強く思っています。

### 編集後記

- 当センターと同類の組織が、あちこちの大学で産声を上げており、教員の新規採用も活発だ。労働力流動化にもプラスになっているのではないだろうか。(是)
- 不慣れな仕事が多く、右往左往の毎日です。多くの方に支えられてここまでできました。ご協力に感謝いたします。(A)
- Create やっとできあがりました。一步一步、着実に進んでいきましょう。(M)
- 初めての学務の仕事に無知を曝け出しては皆さんに助けて頂く毎日です。日々は感謝。(末)
- 創刊号をお届けできることを皆さんと共に喜びたいと思います。(つ)

### ■ 表紙の写真 ■

「自律創造学習」の授業風景をとらえたものです。活気ある学生同士のディスカッションがこの授業の持ち味です。

平成 16 年 10 月 発行

Published October 2004

発行者 高知大学大学教育創造センター

〒780-8520 高知市曙町2丁目5番1号 電話(088)844-8652